
とある会長の必然邂逅

幸坂師宣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある会長の必然邂逅

【Nコード】

N2426N

【作者名】

幸坂師宣

【あらすじ】

ご存知、空気使いさんとのコラボが実現してしまいました；

先生の「とある物質の法則無視」と拙作「とある次元の幻影燈機」のクロスオーバーです。

風波ヶ丘高校生徒会会長の夏日優火はある日奇妙な少女と出会い……一方暗部では『原石』を巡る怪しい動きが見られていた。

『確率変動』と『シュレーディンガーの猫』と暗部が交差する時、次元を超えたクロスオーバーが始まる！！

.....と息巻いてみましたが、完結すると良いなあこれ……

第一話 七月十六日 Limit | Change | Unknown .

第一話 七月十六日 Limit | Change | Unknown .

木原幻生^{きはらげんせい}の失踪から丁度一年が経とうとしていた。

彼が学園都市に遺した負の遺産はあまりにも多く、傷はあまりにも深い。それでも今日もこの都市^{まち}は確かな歪みを蓄積しつつ、ゆつたりと崩壊に向かって穏やかな日常をなぞり続けるのだ

表面上は。

私自身とあまり変わらないじゃないか、と夏^{なつ}日^ひ優^{ゆう}火^かは日々^{ひび}の大半の思考に侵蝕する『記憶』に嘆息する。

実験動物^{モルモット}が日常に回帰したところで、今更歪みを元に戻すことなど出来るはずがない。精々手に入ったのは、あくまで表層的な薄っぺらい言動の上で成立する脆弱な人間関係だけだ。

下手に一般的な学生生活を強要されるよりは、何も考えずに言われた通りに生きていたあの頃の方が寧ろマシだったんじゃないかとさえ、夏日は思うことがあった。

(それもこれも)

彼を恨むのはお門違いだと心の底では分かっている。分かっているても、感情の矛先が最寄りの原因に向くのは止められなかった。

第七学区風波^{かせなみがあか}ヶ丘高等学校からの下校途中、夏日の足は習慣的に近場のコンビニに向かっていた。

数ヶ月前に産声を上げたばかりの夏の熱気から壁一枚で区切られたように涼しい店内に足を踏み入れる。店員の気怠げな応対の声を聞き流しながら何とはなしに視線を辺りに向けると、見慣れない光景が目に留^とまった。

雑誌類の販売コーナーに一人の小柄な少女が立っていた。文章に

してそれだけなら何の変哲もない日常的な光景だが、種々の要素にくさくさよってそれらは紙一重で非日常に爪先を突っ込んでいる。

まず少女の、見る者にこの夏場に嫌と言うほどの暑苦しさを喚起させる、黒い長袖のハイネックの服装からして何らかの異常を感じた。何より目を引いたのは少女の腰くらいまで届くブラチナフロント白金色の長髪だった。結わえも纏めもせず、その服装のせいで白っぽくさえ見えるそれは、惜しげなく西日の下に晒されて光を反射していた。

(外人か……………?)

学園都市における留学生はそう珍しいものでもない。

このコンビニでは全ての雑誌にご丁寧なラバーバンドがかけられているので、まず立ち読み目的でないことは確かである。ひとまず少女のことを頭から追い出した夏日は、入り口から差し向かいの位置にあるドリンクコーナーに足を運んだ。彼女が常日頃から愛飲している「正午の紅茶」によつて、ある程度は彼女の日常への嫌悪感は緩和されていると言つても過言ではなかった。

レジに並んでいると、視界の端にさっきの少女が一冊の雑誌を手に雑誌コーナーからふらふらと歩いてくるのが見えた。ところが、少女はそのままコンビニの自動ドアから外に出て行くこうとしているではないか。

「

？」

こういうところで夏日の生真面目さが露呈する。本人にそれほど自覚はないが、その正義感と完璧主義的な傾向が、彼女を風波ヶ丘高校有史以来の文武両道の才女、ひいては第一学年にも関わらず現生徒会長たらしめた理由でもある。

夏日は一旦列を抜けると、今し方堂々と品物を手に出て行った万引き犯を追つて外に出た。というか、あれだけ堂々と出て行って何で誰も気が付かないんだ？

相変わらずふらふらと歩く少女はまだコンビニを出てすぐのところにいた。

「お、おい

あ、D . . . D o n ' t m o v e ! え

つと、I've witnessed you stole a commodity from the shop! Why don't you give up and be arrested quietly, Huh? and.....」

しどろもどろ（だが完璧な発音で）の英語で自首勧告を敢行する夏日に対し、漸く少女はちよつと小首を傾げるようにして振り返った。

その陶人形のように整った白い顔の左反面を見たとき、夏日の背筋にざわりとしたものが走った。

左目の周りを囲むようにして刺青なのかメイクなのか、紫色の蜘蛛の巣に群青色のアゲハチョウがかかっている意匠が施されている。その目を少し大きく見開くと、少女はさっきの言葉が通じていたのかいなかったのか、僅かに戸惑うように手にしている雑誌に目を落とし、口を開いた。

「けだし」

普通に日本語だった。

困惑の表情を浮かべたまま、少女は非日常的というより非常識な一言を発した。

「やっぱり何か、間違っていただろうか？」

夏日が絶句していると、不意に背後から夏日の肩をがっしりと掴む手があった。

咄嗟に振り返るとゴリラのような巨軀を誇るコンビニの店長が額に青筋を浮かべて仁王立ちしていた。

「お嬢ちゃん.....万引きってのは立派な犯罪なんだぜ？」

「ああ？ それは私じゃなく
「
と言いかけたところで夏日の言葉は尻すばみに消えていく。
「正午の紅茶」のペットボトルを握りしめたままだった。

「……で、さつきから君は何を期待して私の後をついてきているんだ。言っておくが、もうさつきの君が持ち出そうとした『雷撃大王』の代金以上のものは何も出ないぞ」

どうにか（主に夏日が損をする形で）収束したいざこざから十分後、なぜか自身の金魚の糞と化している少女に向かって、夏日はため息混じりに言葉を吐き出した。

常識どころか財布すら持ち合わせていなかった少女は僅かに逡巡するように辺りをきよきよと見回すと、「帰り道が分からなくなつた……」と半ば独り言のように言つた。

「けだし、君を頼れば確実に帰れるらしいから
何じゃそりゃー」。

という叫びは胸の内に留めておくことにする。というか何だ、「らしいから」って。日本語の持つ「奥ゆかしさ」をすべからく「曖昧さ」に曲解した上での表現にしか思えん。

しかし、少女の奇妙な判断があながち間違っているわけではないというのも事実だった。木原幻生の負の遺産の一つたる夏日の『限定した事象の確率を好きなように変動させられる』能力『確率変動』^{リミットチェンジ}をもつてすれば、少女の住んでいる寮に辿り着くことなど容易であるはずだからだ。

どうせこの後に対した用事もないし、「周辺を適当に歩き回っていたら偶然最短時間で少女の寮に辿り着く確率」のパーセンテージを100に調整した上で、

「まあついてくるなら好きにすればいい」

と言い捨てて夏日は勝手に歩き出した。聴覚の注意を背後に向けてみる限り、少女はちゃんと後ろを歩いてきているらしい。

歩き始めて最初の内こそ、軽い散歩ぐらいの調子で空など見上げていた夏日だったが、だんだんと間が持たなくなってきたため、やおら自分から口を開いた。

「どうでもいいんだが」

「

んう？」

形容しがたい発音で、どこから調達したのか猫じゃらしを弄んでいた少女が返答する。

「何の目的で君は白昼堂々犯罪行為に手を染めていたんだ」

「犯罪行為？ と少女は首を傾げるが、すぐに自分が脇に抱えている雑誌のことを思い出す。

「ああ、それは崩音^{くすね}が……昨日持ってきてくれたんだが、どこで手に入るのか聞いたら『コンビニというところだ』と教えてくれたんだ」

「にしたってレジくらい通すだろ」

「みんなやってたぞ？」

「な、何っ!？」

通学路の途中に建設されている以上、あそこのコンビニを利用する客数は風波ヶ丘の生徒が占める割合も少なくない。ここ周辺の風紀はここまで乱れていたのかと一生徒会長として驚愕しかかったが、話をよく聞いてみるとどうやら少女は店内入り口付近に設置されていたフリーペーパーと雑誌の区別が付いていないらしかった。

しかし財布も常識も持たずにコンビニを利用しようとするとはこの少女、留学先の引き籠もりかなんかだろうか。

「崩音とかいうそいつにコンビニの利用方法も聞いておくべきだったな」

「ん。今日辺り聞いてみる」

素直に頷く少女を見ながら、とりあえずその「崩音」に遭遇したら雑誌分の代金は請求しようと思いに決意する夏日だった。

「ところでその制服を見るに、君は風波ヶ丘の生徒なのか？」

少女が純白のスカートに校章の刺繍が入った白のセーターという

夏日の出で立ちを指して尋ねる。

一目で分かるということはやはりこの辺りの生徒のようだ。しかし私服の学校なんてこの辺りにあっただろうか？

「そっだよ」

返答しつつ、自身の中の「留学先引き籠もり説」が濃厚になり始めるのを感じる夏日。

真偽を確認しようと口を開きかけたが、その時丁度少女が「おおここだここ」と声を上げた。

というか、ぶっちゃけ夏日の住んでいる学生寮だった。

「助かった。それじゃ」

「ああ、うん……」

シュビツと鷹揚に片手を上げて互いに別れの挨拶を交わしたものの、二人とも進行方向は全く同じなわけで。

エレベーターに乗り込み、何の悪戯か押したボタンまでもが同じ階だった。

「奇遇だな」

「……………」

既に三回は熟読してほぼ内容を暗記してしまった単語帳に顔を埋めることで気まずい空気を回避する。

それでもって、最終的に隣室の住人であったことまで明らかになった。

「……………もういい、分かった。何の冗談だこれは」

半ば頭を抱えるようにしてついに本音を吐き出した夏日に、ドアノブに手をかけたままの少女がきょとんとした表情で首を傾げた。

「けだし、一年間近く隣人でいたにも関わらず初対面だったかな？

んと……………隣室の及萩暦だ。よろしく」

ここにきて漸く夏日は、丁度一年前に風波財閥の手引きでこの寮に入居する際、挨拶回りに行き損ねた部屋があったのを思い出した。壁越しに物音もせず、新聞受けには許容量を越えた新聞と広告がぎちぎちに押し込まれ、インターホンも壊れていたのでコンタクトも

とれない、まるで生活感に欠ける一室。寮の管理人から「同じ学校の生徒さん住んでるみたいだから」と言われた、自室の隣部屋。

とは言っても夏日は、こんな田舎に建設されたホテルのネオンサイン並みに存在感を放つ少女にお目にかかったことは生徒会長としても学校生活の中で一度も覚えがない。というか、廊下で擦れ違っただけでもかなりのインパクトが残るはずである。

「君は、なんだ……その、風波ヶ丘の生徒なのか？」

「ああ、まあ、在籍してはいるが」

要するにやっぱり引き籠もりであると。

しかし引き籠もりにしたって出席日数が足りなければ退学になるはずなのだが、日々の生徒会の業務においてすらそのような話は聞いたことがなかった。明日辺りにでも生徒名簿で確認をとっておこうと心に留めておく。

「良かったら」

「」

ドアノブを捻ったまま（明らかに鍵がかかっていなかった）、暦が逡巡するようにおずおずと口を開いた。

「ん？」

暦は何か決意を迷っているようだったが、やがて思い切ったように言った。

「あ、上がっていかないか。けだし、学園都市に来てからまともに話したのって、君が初めてだから」

「特に何もない部屋だけど」と暦の自室に招き入れられた夏日だったが、入室したときの第一印象は「箱」だった。部屋には本当にほとんど何もなかったのだ。

白い壁とまっさらなフローリングが剥き出しになり、部屋に入っただけに冷たい無機質な印象を与えている。掃除だけは行き届いているのか、塵や埃はどこにも見当たらなかった。リビングの中央に申し訳程度に一脚の木製のテーブルが置かれていた。

「茶でも出そう」

暦がキッチンの方に駆けていく足音を聞きながら、鞆を置いてテーブルの横に腰を下ろした。何もないとかえって日常的な動作一つとっても違和を感じてしまう。

しかしここまで生活感がないといっそ清々しい。招待されて足を踏み入れたにも関わらず、まるで空き家に不法侵入して居座っているかのような罪悪の錯覚を覚える。

ふと気になって立ち上がった夏日はキッチンに向かった。

キッチンでは暦が湯を沸かしているポットの隣でスカスカの食器棚から簡素なデザインのカップを取り出しているところだった。一応最低限生活に必要な冷蔵庫等の日用品は完備されているらしい。

「ん、どうした？」

「いやちよつと……」

試しに冷蔵庫を開けてみる。普段の夏日なら、お邪魔させてもらっている家でそんなことをすれば失礼に当たるということをちゃんと弁えていたのだろうが、常識外の部屋では若干そういった感覚が麻痺していたのかもしれない。

明らかに密度に欠ける冷却空間を一瞥すると、無言でボタンと蓋を閉めた。

「どうした？」

重ねて怪訝そうに尋ねる暦に対し、夏日が割と真剣な表情を向けた。

「……君の家の食糧事情はどうなってるんだ」

「……？　んと、いつも崩音がコンビニで買ってきて届けてくれるが」

「掃除は？」

「週一のペースで崩音が来てくれるな」

「洗濯」

「崩音が」

「ただだけ優秀なんだ崩音さん。」

額に手をあててよろりとその場で倒れ込みそうになるのをなんとかこらえる。

湯が沸いたのでポットとカップ二つ、茶葉を入れたピッチャーをリビングに二人で運ぶ。テーブルに着いてから唐突に夏日は口を開いた。

「……その……崩音とかいうのに、連絡取れるか」

「え？ 取れないこともないけど……」

先刻から肥大する一方の疑問符を頭に浮かべたままの暦に教えてもらった番号に電話をかける。四回目のコールの後に「はい」と間延びした男の声が応対に出た。会話の主導権を握るのに有利であるう耳に心地よいテノールボイスは、女性の扱いに慣れた優男を容易に連想させた。

「……崩音とかいうのは、お前か？」

「………んれ？ おお？ これ暦ちゃんの番号だね？ あつらー僕の預かり知らぬ間に友達とか作っちゃったのかしらあの子だったら。あ、でも不思議パワーではいんなお姉さんに成長しちゃったとかそういう展開も捨てがたい……ふおおお……」

電話口で本気で悩み始めたぞこの男。

無意識に自分の胸部に目を落としてつつ、夏日は続ける。

「……そ、それはともかく、ちょっとお前に質問と提案があるんだが……」

かくかくしかじかまるまるうまうまと、会話はおよそ十分に渡った。時折暦が気遣わしげに視線をやってきたが、会話の内容までは聞こえていないようだった。

「……と、なるほどねえ。んじやお願ひしてもいいかな？」

「いいというか、こっちからの勝手な提案だしな……というか、お前飲んでるだろ」

「へにや？ いーや全ツ然、僕はしーらふそのもんですからあ」

「受話器にまで酒の臭いがぶんぶんするんだよ」

そして周囲の人混みと思しき雑音に混じって聞こえてくる女性（

それも複数名）の声に何となくこの青年の人間性を垣間見た夏日だった。

通話終了後、夏日の第一声は、

「よく今までこんな奴に家事全般任せてられたな……」
だった。

「いや、けだし公私の切り替えは効く奴だし、まあ酒癖と女癖にやや難ありだがやることはちゃんとやるぞ？」

「まあ、だろうな……とりあえず今ので大体あいつがどんな奴かは分かった」

その後、「そういえば崩音の奴、以前『将来は究極のヒモになりたい』って言ってたけど、『ヒモ』ってどういう意味だ？」と無邪気に聞いてきた暦に対して夏日は頭を抱えることになるのだが、それはとりあえず今は置いておく。

「とにかく……」

テーブルに着席し直し、二人でちょうどいい加減に冷めた茶をずぞーっと啜った後、夏日はまだ怪訝そうな表情でいる暦に宣言した。

「今日から私が君の面倒を見ることになったから」

第一話 七月十六日 Limit | Change | Unknown・(後書き)

いかがでしたでしょうか？

夏日の心理描写など……完全に僕の独自解釈で書き進めたので、全く間違っていたら原作者様に申し訳が立たないです；

というかキャラの書き分け出来てなくね？ 夏日のキャラ違くね？

設定間違ってね？ とまあこう……気になる点でも良いので、毎度のことながら感想頂けると誠に嬉しいです。

更新空くなあこりやorz

第二章 七月十七日 Resignation | World | and | Sign
d | Sign .

テンプレート通りの普段の朝に異物が混入していた。

具体的に言えば、それはまず膝の神経から通常ベッドの上で一人で寝ていたら存在し得ないぐにやっとした触感を伝えてきていた。この時点で夏日の「67階建ての銀行の屋上から魔法少女とミニクロボタと支店長が落下しながら壮絶な戦闘を繰り広げる夢」はほぼ神経間の電気信号のやりとりの外に追いやられる。違和感には気付いたがそれが何であるのかという判断力と現状の接続に失敗しつつ、視線を毛布の方へ向ける。

白金色の繭みたいな物が、夏日の腹の辺りでわだかまっていた。というか何かが腹に絡みついている。

五感が中枢神経に情報を入力し、結果それは早朝の涼気を裂く「ぎよええええ」という悲鳴となって外界に出力された。

ヘッドボードに背中を向けた状態で上体を起こし、腕だけがさがと前進するというエクソシストのなり損ないみたいな移動方法で毛布から這い出ようとすると、絡みついたままの繭もそれに合わせてずるずると同伴し、朝の空気の下にその全貌を晒す結果となった。

「……………はえ？」

枕を抱きしめたままちよっぴり涙目でそれを見下ろす。

及萩暦が夏日の下腹部に腕を回して抱きついたまま、炬燵で丸くなる猫のようにすやすやと眠っていた。

はふっ

と安堵の息を吐いたのも束の間、今度はプラ

イバシーの危機感が警鐘を鳴らしていた。

こいつ、どこから入ってきた？

とりあえず暦の腕を解いてベッドに寝かせておくと、玄関の戸締まりをチェックする。特に問題はなかった。

壁をぶち破られた形跡もないし、ひょっとして空間移動系の能力者か？　との疑惑も浮上するが、すぐに打ち消す。そ

うであれば昨夕家までの順路

を自分に尋ねる必要はなかったはずだし、そもそも自宅の座標を忘れるような奴

が自身の体を転移できるとは思えない。

そうなると必然的に侵入経路は一ヶ所に絞られる　　ベランダ、だ。

確かに昨晩は暑かったので鍵の付いていない網戸のままで眠りについたのだが、ここは17階である。流石に同衾目的で命を張るとは考えにくい。

色々と疑問は残るが、ひとまず朝食の支度に取りかかることにした。どうせ暦にも何か分けてやる予定だったので、ベッドの上にほつたらかしにしたままキッチンに向かった。

十分後、焼き上がったベーコンエッグを皿に移していると、暦が起きてきた。しきりに目をこすっている。毛布から出てきて初めて気付いたのだが、暦は白地に紫と金色の派手なプリントがプリントされたサイズの大きい男物のTシャツを寝間着代わりに来ていた。下は一見何も穿いていない。

「おはよ」

「……お、おはようよ……」

暦が欠伸をかみ殺し損ねながら挨拶を返す。

「……………けだし、今何時だ？」

「六時半だ。時計ならそこにかかってるから」

「こんな時間に起きたの初めてだ……」

再び欠伸をして覚束ない足取りでキッチンを出ていく暦を見送りながら、夏日は思わず苦笑した。

朝食の支度が済んでから寢室を覗くと、案の定暦が二度寝を敢行しようとしてベッドの上で丸まっていた。シーツごと寝台から引きずり降ろす。

「面倒を見ると言った以上、私には君の生活を管理する義務があるんだ。まずは体内時計を調節しろ」

有無を言わず洗面所に連行し、冷水を顔にぶっかけると漸く目が覚めたようだ。

暦はどうも今まで添加物0パーセントの食卓とは無縁の生活を送っていたらしく、並べられた一般的な朝食を眺めて軽いカルチャーショックを受けていた。

「生活習慣病の心配とかしろよな……君は……」

「なんだそれは？」

白米を頬張りながらしれっと己の無知を晒す暦。

それを見ながら、夏日はふと根本的な疑問を思い出す。

「そういえば……一応君も風波ヶ丘の生徒だろ。どうして引き籠もってるんだ？　というか出席日数不足で退学にならないのは何でだ？」

「……」

不意に暦が忙しなかった箸の動きをぴたりと止める。

「学校の方で何か問題でもあったのか？　私も一生徒会長として、生徒のトラブルは見過ごせないし、見過ごしたくないんだ」

「……」

暦は秒針が半周するくらいの間微動だにせずに黙りこくっていたが、やがて半開きにした口から溜めていた水が漏れ出すような口調で、

「……けだし、あまり詮索しない方がいい」

と言った。続けて、

「いつか、話せるときがきたら話す」
「そうか」

夏日は実に淡々と話題を切り上げると、食べ終えた自分の食器をシンクに持って行った。

「……………」

「…………？ 何だ？」

「………… いや、やけにあっさり引き下がるな」

「本人がそんなに真剣な表情で聞かれたら迷惑だという顔をしてるんだ。時が来たら話す時まで言っているんだから、別にここで食い下がるメリットは何もない」

「………… けだし、ここはそれでも食い下がってヒロインの悩みを聞き出してやる場面じゃないのか？」

「どこから得た知識だそれは………… ああいい、いい。大体予想は付いた」

「なんか一人だけシリアスな空気かと思って期待しちゃったぞ！！」

「何をだよ………… 一時のテンションに身を任せると良くて恥をかくし悪くて身を滅ぼす。覚えておけ………… って待て待て、箸を投げるな立って暴れるな！！」

朝からいささか平安に欠ける日本の正しいテーブルマナー教室が開催された。

「と、とにかく……………」

登校前から息を荒げながら、夏日は学生鞆を掴んだ。

「部屋にいるならいるで戸締まりはしっかりな。自室に戻るならスパアキーは廊下に出て左脇の花壇の中段右から二番目のパンジーの下だ。分かったか？」

今し方の揉み合いで夏日スペシャル（背後から脇で頭を固めて両こめかみ拳でぐりぐり）を食らって涙目で食卓に突っ伏している暦が、がくんがくんと首を動かした。了承の意とらえて問題ないようだ。

玄関のドアを開けてから思い出したように「そういえば昼食は冷

蔵庫にあるから、レンジで40秒温めるんだぞー」と声をかけ、寮を出た。

いつもの道を歩きながら、朝の外気に冷やされた頭で考える。

ああは言ったが、夏日も一応は暦のことを気にかけてはいた。生徒会長としての義務を感じていたからでもあるし

それ

以上に、彼女にしては珍しく一個人として心配だったのだ。自主的に「面倒を見る」と宣言した、その責任感も後押ししていたのかもしれない。

ふと顔を上げ、前方にオールバックのちゃらちゃらした雰囲気の少年とふざけ合いながら登校する彼を認めて思わずため息が出た。

時間飛んで西日射す放課後。

「うだーっ」

与えられた責務と同じくらい広大な生徒会室に響く呻き声を聞きながら、夏日優火は自分も何やら喚きたいのをこらえて外弁慶用のクールな仮面を崩すことなく本日147枚目の案件要請書に「不採用」の判子を赤々と押した。

夏休み直前ということで「夏期休業期間中における本校の部局・委員会活動管理案件書」の作製に生徒会が駆り立てられているという状況だったが、いかんせん過度の人員不足が目に見え余る。

「職員選抜？ で決まったからって五人は無理ありすぎでしょ？」

「あ？ そうなの？」

バックスコープ

さとう

ふみや

『背後透視』

佐藤

郁弥

ののんびりとした声に、先刻の呻き声の主

である『振動操作』

バイプレーヤー

ゆめかわしゅうへい

が書類の山から面を上げて反応する。

「しかも、内二人が風紀委員の夏期公募準備にかなり時間とられてるっていうしね？」

「しゃーねーのは分かってんだがよオ……三人でこの量ってーとナメられてるとしか思えねーんだよなあ……会長の足の裏だったらいくらでも舐めてつかまつるのにおぶべきゃあ」

「口動かしてる暇があるなら手を動かせハゲ」

今し方1343ページの数学解法辞典を投擲したとは思えない冷淡さで夏日が言う。

昼休みに校内のデータベースにアクセスして生徒会権限を駆使し、生徒の個人情報漁ってみた夏日だったが、結局暦に関しては何も分からなかった。一応名簿上に暦の名はあったのだが、住所はおろか所属するクラスも学年も、基本的なパーソナルデータ意外は全て校長権限以下のアクセスが制限されているという異常な有様だったのだ。

そんなわけで、普段より三分増くらい夏日の不機嫌度は上昇していたのだが、普段より感情を表に出さない会長のコンディションに對しただでさえ朴念仁の同僚二人が機微を察知するなど、土台期待する方が間違っているのだった。

「……と仰る生徒会長も割と窓の外気にしてらっしゃるよね？」

「ま、マジかつ！？　かかか会長、まさかこのサマームードに乗せられて意中の男の幻想でもばぶりしゃすっ」

両鼻孔にティッシュペーパーを詰めて復帰した途端、そのとばかりとしてフリスビーのような回転と共に飛んできた電気スタンドに再び昏倒させられる夢革。そこはかとなく彼を見下しつつ、佐藤の指摘が存外的を射ていたことに夏日は内心の動揺を気取られないよう苦心していた。何となく窓の外の芝生を歩いて下校する彼の後ろ姿を目で追っていたのだ（直後に今朝も見たオールバックが背後からドロップキックを食らわせていたが）。

だが別に思春期特有の馬鹿馬鹿しいセンチメンタルな情動で彼の背中に見蕩れていたとか、そういうわけではない。ただ、その姿に想起させられた過去と現在の照合に忘我していただけだ。

はあ、と今日で何度目になるか分からないため息を吐いて、無意識に再び窓の外に目をやったとき、妙なことに気付いた。

「あ……………」

見覚えのある顔が窓の外からこちらを見つめ返していた。この時

間だとまだ自身の顔が窓に映るには早すぎる。

事実を認識するのに体感時間にして3分、実際のところ12秒の時間を要した。

貼り付いている、及萩暦、こちらを見つめて、窓に、三階の。

上記の語群を助詞を用いて正しい日本語文に並べ替えなさい（配点：完全回答4点）。

「~~~~~干 %ッ!? （無言）」

後から思い返すにつけても、よくここで絶叫しなかったものだと思う。

可能な限り不自然でない動きで立ち上がり、窓を開けた。幸い、後の二人は書類に没頭していて一連の挙動に含まれる不信感に気付いていないようだ。

暦は猫のようにするりと窓と窓枠の隙間から生徒会室に忍び込むと、そのまま素早い匍匐全身のような動きで生徒会長用事務機の脚の間に丸まるような形で収まった。直後に佐藤が顔を上げたので、心臓が肋骨2、3本をスクラップにしてもおかしくなくらい飛び跳ねる。

「会長？ 俺この後ちよつと医者に用事があるんで帰ってもいいですか？ 一応今日の分のノルマはクリアしたんで？」

「あ？ え？ ああ、うん、そうだな。養生第一だな。その、うん、帰っていいぞ」

表情を崩さないことだけに相当集中して言ったので、かなり怪しい言動になった。佐藤は特に何も引つかかることがなかったのか、「ほいじゃ、お先に失礼しますよ？」と言って素直に生徒会室を後にした。透視能力者の端くれのくせに肝心なところは見えてないのな、と頭の片隅で突っ込みを入れておく。

「おお！？ 佐藤テメー一人だけバツクレてんじゃねーぞ！？ あ、でも折角の生徒会長との二人っきりの時間ですしィ……うおお、どうしよっかなア……」

「星にでも土にでも還りたまえ、早急に」

残るバ力を説得：実力行使Ⅱ 3：7くらいの割合で廊下に蹴り出した後、夏日は生徒会室の鍵を内側から閉めて一息吐いた。
「で」

いつの間に机の下から這い出したのか、絨毯敷きの生徒会室の床の上をごろごろ転がっていた暦が今にも「にやあ」と言いそうな緩んだ顔でこつちを見た。

「素晴らしいなこは！ 絨毯はふかふかだしクーラーもガンガンだぞ。匂いも悪くないし、後は飯があれば言うことない。実に贅沢者だなあ君は」

「何しに來たんだ君は！！」

つい大声で突っ込みを入れる夏日に対し、今度は会長用の椅子によじ登り始めた暦が体を反らして逆さまになった視界で夏日をとらえる。

「ご挨拶だなあ。けだし、生徒が学校に來て何が悪いというのだね」

「そうかそうか放課後に窓から登校ご苦労だったな変質者」

「む、不躰かつ失礼極まりないぞ夏日」

少しむっとした表情でそう言う暦は会長用の椅子に半ばふんぞり返るようにして足を組んで座っていた。何様だこいつは。

「……………分かった。生徒が学校に來ることに關して何ら不都合がないことは認める。じゃあ言葉を變えるが、君は何の目的で生徒会室に侵入しているんだ？」

「いや、けだし暇だったから君の顔でも拝みにね」

「昼飯は」

「食った。旨かった」

やれやれ、と夏日は肩をすくめると手近なパイプ椅子に半ばくずおれるようにして腰を下ろした。

……まずは可及的速やかにこの阿呆を人目に付かぬよう連れ帰らなければ。

「ん？ 仕事の方はもういいのか？」

ばたばたと慌ただしく帰り支度を始めた夏日に暦が声をかけた。

「職員用データーベースにも載ってないような不審者を学校に長期滞在させる勇氣は流石に私にも無いからな」

「……調べたのか？」

「ああ、何も出なかったがね」

だが逆に『何も出ない』という結果が、暦が普通の学生生活を送れない身分であるということを暗に夏日に示していた。

「まあいいか。けだし、僕が学校関係者に見つかることはないから安心していい。校門横で待ってる」

そう言うと言はれ夏日が止める間もなくぴょんと窓から飛び降りた。

「おい、何を」

驚いて窓辺に駆け寄ってみると、暦は器用に窓の外の広葉樹の幹に飛びついてするすると下に降りていくところだった。

「気になったんだが」

「？」

帰路につく途中、暦が不意に口を開いた。今まで続いていた会話が一段落してしばらくしてからのことだったが、夏日は何となく会話の最中も暦が何か言おうとしてそれを口に出せずにいるのを薄々感じていた。

「何だ？」

「……………けだし、君は友達が少ないのか？ 夏日」

飲みかけの「正午の紅茶」を危うく吹き出すところだった。

むせかえりながら咎めるような視線を向けると、自身の質問に対する嫌悪と勘違いしたのか、暦は「や、その」と手を振りながら言葉が濁した。

「君自身の人間性における問題点を指摘したいわけじゃないんだ。そこは信じてくれ。ただ」

「いいんだ」

気管に僅かな引っかかりを感じながら夏日は言った。

「私に友人と呼べる人物がいないのは確かだし……というか、何で知ってる？」

「昼頃から見てたからな」

「昼頃って……」

予想外の返答に思わず絶句する。

「けだし、あんまりすぐに腹が減ったもんだから昼飯を食ったのが11時頃だったんだ。んで暇だったからつい」

「暇潰しに私の観察にわざわざ侵入したってか……」

常識が無いのやら行動力があるのやら。というよりよく放課後まで見つからなかったものである。

「その、見ている限り君がクラスでの歓談に加わる光景は見られなかったから……いつも一人で、本読んでるか寝てるかだったし」

「とつくに諦めてるよ」

別に嫌な顔をするでもなく、夏日は今朝の暦に対するものと同じ淡泊さで答えた。

「というより、一年前の時点で決まってたんだ。ずれてるんだよ私は。どこか、あの連中とはな」

「……………寂しくないのか？」

「そう、と言えば嘘かな。でも、仕方がない。諦めるのには慣れてるんだ」

チャイルドエラー

『置き去り』の孤児院で家族にはもう会えないと知ったときも。

木原幻生の実験への協力とはもはや取り返しのつかない領域に達してしまっていると知ったときも。そして、居場所を失い、ずれた日常の中で生きなければならぬと知ったときも。

手の届かないことを願っても仕方がないし、自分の手の中でできることだけに目を向けるので精一杯。幼少の頃から築き上げられて

きた夏日の思考回路が導き出した処世術は、実に自身に対して寛容で、心地良い抑圧に満ちている。

心なしか歩調を落とした暦はしばらく夏日の言葉を咀嚼していたが、やがてゆつくりとした嚙下と共に言葉を吐き出した。

「そんな……」

「ん？」

「……… そんなに、世界に対して狭い視点で構えなくてもいいんじゃないか」

「………」

「けだし、君の周りの世界は君が思ってるほど歪じゃあないさ」

「……… どういう意味だ？」

「まあね。その内分かるだろ」

なぜか機嫌良さそうにそう言くと、暦は「夏日、あれ」と夏日の制服の袖をくいくいと引つ張って公園の入り口付近に停まっているキャンピングカーの屋台を指した。

「何だ？」

「食べたい」

メニュー表の黒板を見て目眩を起こしかけた。

一本二千円である。

「……… また随分と強気な値段設定だな……」

あまりに現実味のない光景にまるで他人事のように呟く夏日。ここまでくると強気を通り越して遙か高みから見下されているような気さえする。

こちらの衝撃を余所に屋台の方にててつと駆け寄っていく暦を見ながら茫然自失していると、背後から誰かが馴れ馴れしく話しかけてきた。

「ねえねえちょっとそのねえちゃん、今ヒマ？ ヒマそっすねヒマだねつかヒマにしか見えねヒマけってー」

「はい？」

耳元にまとわりつくような声に不快感を覚えながら振り返ると、

六人くらいの柄の悪そうな高校生が気味の悪い笑みを浮かべながら立っていた。

「ちよつとねえオレらと遊んでって欲しいなーとか思ってたんだけど今ヒマっしょ？ つわけでちよろつと一名様ご案内ーいって感じでほらほら」

そのまま五人で周りを囲み、一人が肩を抱くようにして強制連行される。

その頃になって漸く（あ、これナンパか……）と夏日は気付いた。正確に言えばそれも間違っているのだが、その時の夏日の頭の中には暦と二千元とホットドッグしか無かった。

首を捻って屋台の方を確認すると、暦はメニューボードを眺めたり店員が調理しているところを観察したりするので気付いていないようだ。

抵抗するべきかと逡巡していたところ、路地裏の入り口が見えてきた辺りで夏日の頭に妙案が浮かんだ。

五分後。

「どこ行ってたんだ夏日。勝手に蒸発するからけだし置き去りにされたかと思っ
て焦ったぞ」

「すまんすまん。それより、四千元あるからそれ買って帰ろう」
手についた埃をぱんぱんと払いながら、夏日は爽やかな笑顔でそう言った。

第二章 七月十七日 Resignation World and Sign

安西先生、バトルが書きたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2426n/>

とある会長の必然邂逅

2010年10月8日10時30分発行